



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	本間浩昭著『見えない壁：北方四島の記憶』
Author(s)	本田, 良一
Citation	境界研究, 16, 59-63
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.16.59
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99364
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_06.pdf



[書評]

本間浩昭著『見えない壁：北方四島の記憶』*

本 田 良 一

「足かけ36年にわたり根室通信部(現社会部北海道グループ根室)で取材を続ける記者」と著者紹介にある通り、著者は根室に根を張り、定点観測を続ける毎日新聞の現役記者だ。

私は1989年4月まで3年ほど、北海道新聞根室支局に在籍していた。赴任したばかりの本間氏とは4カ月、根室で重なっているほか、その後も根室への出張した際、何度も顔を合わせていた。

通常、新聞記者は3～5年程度で異動になる。30年以上も、同じ土地で記者を続けるのは異例だ。毎日新聞社は個性的な記者による新聞協会賞を最多の35回受賞している。それだけ懐が深い社風なのだろう、と思っていた。が、ある時、先輩記者から「本間氏は『異動させるのなら、辞める』と言って異動辞令を拒否している」と聞いた。実際は、異動話が浮上するたびに先輩やOB記者が幹部に働きかけて、異動話を潰していたという。それほど著者は毎日新聞にとって、いや新聞業界にとってもユニークで、貴重な存在である。

根室市のキャッチフレーズは「朝日にいちばん近い街」。日本本土最東端の納沙布岬には元日の朝、初日を拝もうと多くの市民や観光客が訪れ、その様子を各テレビ局が放映するのが恒例になっている。その岬から3.7キロ離れた海上に見えるのが貝殻島だ。

本書も触れている通り、ソ連は日本がポツダム宣言を受諾し、無条件降伏した2週間後の1945年8月28日から、遅くとも9月5日までに択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の北方四島(北方領土)を占拠した。貝殻島は歯舞群島のひとつで、最も北海道に近い。「島」と名前が付いているが、広さは10平方メートルの岩礁で、日本が1937年(大正12年)4月に設置した灯台が建っている。岬を訪れた観光客は貝殻島灯台と、その背後に見える水晶島など歯舞群島の島々を見て、その近さに驚く。

貝殻島までの3.7キロの真ん中に「中間ライン」と呼ばれる、事実上の「国境線」が通っている。根室海峡に引かれた、本書のタイトル「見えない壁」だ。日本漁船がこのラインを越えると、ソ連(ロシア)の警備艇に拿捕されたり、銃撃を受けたりする。1946年4月以降、

* 本間浩昭著『見えない壁：北方四島の記憶』角川書店、2025年。

根室海峡で1351隻、9575人が拿捕された(2025年12月現在)⁽¹⁾。2006年8月に銃撃を受けて死亡したカニかご漁船の甲板員1人を含めて、抑留中の自殺や拿捕の際の事故などで31人が亡くなっている。

この根室海峡を含む北方四島水域では1980年代後半まで、日本の情報をソ連側に与える見返りに安全な操業を保証されるレボ船や、堂々と中間ラインを越えてウニやカニをとりまくった「特攻船」と呼ばれる小型密漁船が横行していた。特攻船は200馬力の船外機2～4基を装備し、ソ連警備艇に発見されても海面を飛ぶような猛スピードで追跡を振り切り、拿捕されず日本水域へ逃げ戻った。

根室は東西両陣営が接する最前線だった。私が根室支局にいたころ、根室市の人口は4万2000人余り(現在は約2万1000人)だったが、当時も今も朝日、読売、毎日が記者各1人、NHKが記者とカメラマンを置き、民放各社も地元在住の嘱託カメラマンなどを抱えている。全国ニュースになるネタが絶えないからだ。

同業者からすると、著者のような、地元に関根を張り表も裏も知り尽くしている記者は怖い。著者の多くの記事の中で、2010年1月末に発生した安全操業船2隻に対する銃撃事件のスクープは、その一例といえる。安全操業は通常、事故や遭難のないことを指すが、根室地域では拿捕や銃撃の心配なく、安心・安全に漁労ができることを指す。領土問題に触れない形で日ロの政府間協定が締結され、北方四島の3～12カイリのロシア主張領海を漁場にして1998年10月、スタート。2005年と07年、区域外操業をして拿捕されたことはあったが、銃撃事件は初めて。著者は羅臼漁港(羅臼町)に帰港した2隻が国境警備隊のヘリコプターから照明弾を受けていた、と記事にした。

実際は照明弾ではなく、銃弾を受けていたのだが、照明弾も被弾すれば死んだり、大けがをしたりする。安全操業が実は「安全」ではない、形容矛盾の現実を明らかにした見事なスクープだった。第1管区海上保安本部(小樽)は「2隻の船体に計20カ所の被弾の痕跡があった」と公表し、北海道新聞など他社は後追い記事を書いた。

東西の冷戦時代、そして1989年の冷戦終結後も拿捕・銃撃事件は続いたが、人道主義に基づく「見えない壁」を越えることのできる日ソ(日ロ)協定も存在した。1963年に始まった日ソ民間協定に基づく貝殻島コンブ漁と、翌64年にスタートした、元島民が祖先の墓参りをする北方墓参だ。ソ連崩壊後の92年4月には元島民や関係者らと、北方領土在住のロシア人住民が相互に行き来する「ビザなし交流」、99年には元島民がふるさとを訪れる「自由訪問」も始まった。いずれも領土問題に触れないようソ連(ロシア)側が発行するビザや、操業許可証などを必要としない枠組みだ。北方四島との行き来には日本の専用船などが使用され、根室港が拠点になった。

こうした墓参、ビザなし交流、自由訪問の出発前と、訪問後には根室で元島民ら参加者

(1) 根室市・北方領土問題対策協会『北方領土 日本の領土』2023年、93頁など。

の代表が記者会見を行う。多くの記者は参加者の感想などを記事にして終わるが、著者はそれで終わらない。全国からやってきた元島民の中で、「これは」と思う人物がいれば、その後も根室で詳しい話を聞き、さらに自宅や連絡先を教えてもらい、埼玉県、千葉県、神奈川県、新潟県など道内外の自宅を何度もたずねて取材を重ねた。

根室地方には元島民が多く暮らす。ソ連軍の侵攻時、北方四島には1万7000人余りが住んでいたが、その半数が島を脱出したり、島を追われたりした後、「島が返ってきたら、すぐに戻れるように」と根室地方に居を定めた。著者はこうした元島民の声も丹念に集めた。本書は、これら元島民の膨大なインタビューメモと、元島民が残した手記をベースに書かれたルポルタージュだ。

元島民たちに何が起きていたのか。本著は予期しなかったソ連軍侵攻(第1章)、ソ連軍の厳しい監視をくぐりぬけた、決死の脱出劇(第2章)、移住してきたソ連の民間人らとの混住体験(第3章)、突然の強制退去命令と、多数の死者を出した樺太(サハリン)・真岡經由の悲惨な引き揚げ(第4章)、ソ連側に請われて残留した一家のその後(第5章)と、北方四島を含む千島列島の前史、日本と帝政ロシアの間で決まった国境線画定によって生活と漁労の場を追われた千島アイヌの悲劇(第6章)、元島民が考えた、混住を想定した領土問題の解決策(第7章)という構成になっている。

元島民の話は、当然ながら本人の周囲の出来事に限定されている。これを他の元島民の話、北海道立文書館の各種記録、資料、ロシア側の著作などと突き合わせ、モザイク画のようにソ連軍の占領下での生活、ソ連軍人による略奪や暴力行為、殺傷事件、被占領民として理不尽な命令にも従わざるを得ないみじめな体験、ソ連の民間人との交流など元島民が置かれた当時の状況を立体的に再現し、俯瞰した形で分かりやすくルポしている。

第1章で紹介されている元島民の話に触れたい。1945年8月27日午前11時すぎ、択捉島留別に上陸したソ連軍は、最初に留別郵便局を占拠し、本土との有線通信を断つ。当時、留別郵便局長だった三上一郎氏は、ソ連軍の侵攻を本土に速報しようと、部下の局員1人を連れて、無線電信装置がある紗那郵便局へ馬で向かう。距離は28キロ。昼過ぎ、出発したが、ソ連軍歩哨の目をかいくぐり、夜道の間道をたどり紗那に到着したのは午後9時だった。紗那郵便局の局員が必死で何度も打電すると、1時間後、奇跡的に本土へ通じる。それを確認した三上氏らは留別への帰途に就く。局長の不在をソ連軍に知られないようにしなければならなかった。三上が留別へ戻ったのは、すでに明るくなっていた翌早朝だった。三上氏は監視の目を避けるため朝もやに紛れ、50メートルの留別川を泳いでわたり、ずぶ濡れ姿で帰宅する。当時、8歳だった三上氏の息子・洋一氏の詳細な証言と、文書館にある記録などを元にしてのいる。

第2章では北方四島のソ連軍侵攻の際、米国の艦船も利用されたことにも触れている。ソ連を支援する「レンド・リース法」に基づき、米国は上陸用舟艇30隻、掃海艇55隻、護

衛艦28隻、駆潜艇32隻、工作船4隻の計149隻を無償で貸与。このうち、11隻が色丹島を含む千島侵攻に利用された。すでに明らかになっていたが、一般にはあまり知られていない史実だ。

ソ連軍が占拠した後、ぼろ着をまとった民間人が続々と送り込まれてくる。これは第3章で詳しく描かれているが、独ソ戦の戦場になったウクライナ地方からの移民が多かった。

本書は歴史に埋もれそうになった元島民の単なる昔話で終わっていない。というのも、ロシアによるクリミア併合やウクライナ侵攻という現代の事象と重ねて描いているからだ。第二次大戦中の「レンド・リース法」は、77年後の2022年6月、「ウクライナ民主主義防衛レンド・リース法」と名前を変えて再登場する。ロシアの軍事侵攻を受けたウクライナに対して、米国が大量の軍事物資の貸与を可能にする法律だ。

ロシアが2014年、一方的に併合したクリミア半島や、22年2月以降、ロシア軍が侵攻して占拠したウクライナ東部では、ウクライナ人が避難して空き家になったアパートに、ロシア人の新住民が続々と移り住んでいる。第3章で詳述される日本人の元島民と、ソ連人の移住者との混住、自宅での共同生活、国民学校での午前中はソビエト国民、午後は日本人子弟という授業体制、その後4章で描かれている強制退去を読んだ読者は「被占領地に残ったウクライナ人もいずれ追われるのではないか」と考えるだろう。

第5章は、納沙布岬から見える水晶島に残留した油本繁一家8人がたどった、その後の数奇な人生を伝えている。一家は1951年、移住命令を受けて水晶島からサハリン西海岸の村へ。油本氏は漁業、林業の労働者として働きながら、中学と定時制高校(夜学)を卒業し、代用教員になるためソ連国籍を取得した。その後、1人だけ実家を離れてサハリンの最大都市・ユジノサハリンスク市へ転居し、市役所で働く。樺太に残留していた日本人女性と結婚し、子どもも生まれる。日本への帰国願いは3度却下され、ようやく4度目で実現する。1970年12月、43歳になっていた。帰国後はロシア語能力を買われて、大手商社に入社し、サハリン大陸棚の石油・ガス開発プロジェクトに携わった。

第7章で取り上げているのは元留別郵便局長三上一郎氏の息子、洋一氏が考えた領土問題の解決の試案だ。将来の解決策のひとつとして伝えたかったのだろう。日本への四島返還を前提とし、全体の3割をロシア人に貸与し、日本もロシア側と同じ3割を活用する。残る4割は自然保護区として日ロ両国で保全するという案だ。3:3:4の配分だが、自然保護区になる4を相互の「入会地」と考えて、三上洋一氏は「返還のための三三七拍子」と説明している。

著者はNPO法人「北の海の動物センター」(網走市)の理事でもある。ビザなし交流の枠組みの中の「専門家交流」の一員として、北方四島の生態系などの調査にも2000年から毎年、計6回参加し、北方四島と千島列島のトドやアザラシ、海鳥など生態系の調査を実施、

人間との共生に向けた調査・研究、政策提言などを行っている。この関連で、2005年7月に世界自然遺産に登録された知床の区域を、北方領土を含む千島列島ウルップ島まで拡大して「日露平和公園」とする提案にも深く関わった。この地域の豊かな自然を保全すると同時に、領土問題解決の突破口とする狙いがある。こうした一連の活動も三上氏の試案「返還のための三三七拍子」を取り上げた背景にあるのだと思う。

ウクライナ侵攻を理由にして、日本政府は欧米と足並みを揃えて対ロ制裁に踏み切った。これに対して、ロシアは「ビザなし交流」「自由訪問」を破棄し、安全操業を凍結すると一方的に通告した。貝殻島コンブ漁のほか、北方墓参も形の上では「継続」されているが、墓参について日本政府は「参加者の安全が確保される保障がない」として実施を見合わせている。

戦後80年が経過し、約1万7000人いた元島民は4907人になり、平均年齢も89.6歳(2025年6月末現在)になった⁽²⁾。しかも、そのうちソ連軍の侵攻当時、小学生以上で記憶が残っている人は少ない。本書で紹介された証言者の多くも故人になっている。その意味で、本書はぎりぎりのタイミングで元島民の肉声とソ連軍侵攻の実態、その後の出来事を伝える貴重な記録だ。

著者の膨大なメモには、本書に収められなかった多くの証言がまだ、残っているはずだ。メモの中に埋もれさせただけでは消えてしまう。それも何らかの形で発表してもらいたいと思う。

(2) 「占領80年、返らぬ北方領土 日ロ交渉中断、解決見えず：本島民の平均年齢89歳に」時事ドットコム、2025年8月25日[<https://www.jiji.com/jc/article?k=2025081800527&g=pol>] (2026年1月31日閲覧)。